

講義の談話における「が」「けれども」の用法

Usage of Japanese particles *ga* and *keredomo* in lecture discourse

石黒 圭

要旨

本研究は、人文科学系の4本の講義において、接続助詞「が」「けれども」とその変異形（ガ・ケド類とする）の使用実態を調査・考察したものである。その結果、つぎのようなことがわかった。

- ①講義におけるガ・ケド類は26秒に1回程度出現している。
- ②講義のガ・ケド類のうち、前置き用法が4割程度でもっとも多く、続いて逆接用法、挿入用法が2割弱、文末用法、提題用法が1割強となる。
- ③講義全体では逆接用法のガ・ケド類は多いとは言えない。また、ガ・ケド類が逆接用法を喚起するのに逆接の接続詞の力を借りることがある。
- ④前置き用法は予告的に、挿入用法は補足的に受講者の理解に役立つ情報を示す。この二つは文の構造を複雑にしがちだが、文の構造ではなく情報の内容に意識が向けば、講義のポイントを知る手がかりとなる。
- ⑤提題用法はパワーポイントのスライドとともに使われやすく、視覚情報を用いた講義内容の構造化が図りやすくなる。
- ⑥相手の反応を引きだすことを目的とした文末用法は、あまり多くは使われないが、会話に近い話体の講義では増加する傾向にある。

キーワード：逆接、前置き、挿入、提題、文末

1. はじめに

本稿で扱う講義の接続詞とは広義の接続詞で、接続詞相当の機能を持つ副詞や連語を含む。

【表1】総文数にたいする接続詞の出現頻度（石黒ほか（2009：79）参照）

ジャンル	総文数	接続詞数	割合 (%)
社説	99,514	12,156	12.2%
コラム	36,527	2,895	7.9%
論文	19,705	5,020	25.5%
エッセイ	17,952	2,365	13.2%
小説	730,510	75,709	10.4%
シナリオ	38,984	1,186	3.0%
講義	6,717	2,481	36.9%

講義の接続詞をほかのジャンルと比べた場合、二つの大きな特徴がある。一つは、使用頻度が非常に高いということである。表1は、石黒ほか(2009:79)からの転載であるが、講義の接続詞の出現頻度が36.9%を占め、3文に1文以上に接続詞が現れていることがわかる。

講義の接続詞のもう一つの特徴は、接続関係から見た場合、逆接の出現頻度が低いということがある。表2は、石黒ほか(2009:80-82)から、各ジャンルの出現頻度上位5位までを抜きだしたものであるが、社説・コラム・論文・エッセイ・小説・シナリオと、講義を除くすべてのジャンルで、1位は「しかし」「だが」「でも」といった逆接の接続詞が占めている。

しかし、講義だけは「で」をはじめとして、おもに添加を表す接続詞「で」「それから」「そして」が上位3位を占め、帰結を表す「つまり」「だから」がそれに続いている。ちなみに、逆接の接続詞は「でも」が6位で初めて現れ、用例数は51と相対的に少ない。

【表2】接続詞の種類別出現頻度上位5位(その1)(石黒ほか(2009:80-82)参照)

	社説	出現数	コラム	出現数	論文	出現数	エッセイ	出現数
1	しかし	2,942	だが	667	しかし	700	しかし	346
2	だが	1,752	しかし	259	また	488	そして	249
3	また	821	ただ	171	そして	305	だが	140
4	さらに	582	だから	96	さらに	233	ところが	108
5	一方	494	もっとも	91	たとえば	204	だから	94

【表2】接続詞の種類別出現頻度上位5位(その2)(石黒ほか(2009:80-82)参照)

	小説	出現数	シナリオ	出現数	講義	出現数
1	しかし	15,464	でも	227	で	1,108
2	そして	10,788	だから	145	それから	251
3	だが	3,553	じゃあ	84	そして	146
4	それから	3,051	それで	69	つまり	99
5	すると	2,755	だって	62	だから	80

このように、接続詞から見ると、講義というジャンルにおける談話展開は順接型を基調とすると考えられている(金久保(1993)、石黒ほか(2009)など)。

しかし、はたしてそれは事実なのだろうか。そうした疑問が生じる理由は、講義には「が」「けど」「けれど」「けども」「けれども」といった接続助詞(以下ガ・ケド類と表記する)が豊富に使われているからである。

たしかに、講義を眺めていると、逆接の「でも」や「しかし」の出現数は低いのだが、それをガ・ケド類が補っているような印象を受けるのである。これがもし正しいなら、講義はかならずしも順接基調ではなく、文の切り方がほかのジャンルと異なっているにすぎず、1文のなかに逆接が含まれているのではないかという仮説が成り立つ。講義の談話は

独話であるため、文よりも節が基本単位となっており、1文が長く続くことが少なくないからである。

そこで、リサーチ・クエスチョンとして、以下の三つを立てる。

- ① 講義におけるガ・ケド類の出現頻度はどのくらいなのか。
- ② 講義のガ・ケド類のうち、何%ぐらいが逆接用法なのか。
- ③ もし、逆接用法のガ・ケド類が多いなら、逆接の接続詞「でも」「しかし」などどのような関係にあるのか。また、もし、逆接のガ・ケド類がさほど多くないなら、いったいガ・ケド類は逆接以外のどのような機能を果たしているのか。

その3点をとおして、講義でガ・ケド類が多用されている実態とその理由を明らかにしたい。

本研究は、稿末で示す科研費の助成を受けたものである。ここでは、人文科学系の14講義が扱われているが、本稿は、そのなかで、詳細な理解データを収集した講義A、講義B、講義G、講義Hの4本を対象にする。分析に先立ち、その概要と性格を示す。

【講義Aの概要】接続詞による「言い換え」の技法について、まず、「リダンダンシア」を例に定義をして、次に、書き言葉の「言い換え」の特徴として、接続詞「すなわち」「つまり」「要するに」の用法を述べる。さらに、話し言葉の「言い換え」について、接続詞「ていうか」の用法を説明し、最後に、講義内容の要点をまとめて、次回の講義を予告する。

【講義Bの概要】レトリックの「多重」の技法について、商品名「SUNOMO」によって導入して、次に、かいけつゾロリを例に駄洒落が多重の技法につながることを述べる。さらに、芥川龍之介、小沼丹、国木田独步、夏目漱石の文学作品において「多重」の用法を概観し、井上ひさしのパロディの技法を集中的に論じることで講義をまとめる。

【講義Gの概要】「日本語の人称表現」について、まず、社会言語学の「種類」「選択」「変化」に基づく講義の課題の定義と四つの特徴を示し、次に、人称表現の種類・話し手・聞き手や状況・時代変化の例と用法を述べ、最後に、日本語の人称表現の四つの特徴を反復して講義内容をまとめ、終える。

【講義Hの概要】「日本語の動詞の活用」について、二つ（変格活用を含めると三つ）のタイプがあり、国語教育と日本語教育では二つのタイプの名称や活用の考え方が異なることを示した後、その二つのタイプを語形から見分ける方法を提示し、そこには古典語から現代語になる際の変化の痕跡が残っていることを指摘し、終える。

講義Aは30代男性の61分42秒の講義、講義Bは40代女性の51分の講義、講義Gは40代男性の97分の講義、講義Hは50代女性の96分30秒の講義である。時間にはい

ずれも調査説明の時間も含んでいる。講義 A と講義 B は大学の実際の講義であり（残りの 30 分は講義理解の調査に充てられている）、講義 G と講義 H は、受講者である学部学生が実際に講義を聞くなかで行われた模擬講義である。

2. ガ・ケド類の出現頻度

逆接の接続詞およびガ・ケド類の出現頻度は【表 3】のようになる。

逆接の接続詞の出現頻度は、青木（2014）を参考にした。出現している形式は「(それでも)」「ところが」「けれども(その変異形も含む)」「だが(その変異形も含む)」「しかし」「それどころか」である。一方、ガ・ケド類の出現頻度は、MeCab による形態素解析を行い、筆者自身が目で確認したものによる。

【表 3】逆接の接続詞およびガ・ケド類の出現頻度

	逆接の接続詞			ガ・ケド類		
	文頭	文中	小計	ガ	ケド類	小計
講義 A	12	7	19	51	71	122
講義 B	17	8	25	18	120	138
講義 G	31	14	45	14	242	256
講義 H	8	3	11	99	105	204
計	68	32	100	182	538	720

720 という数字は、ガ・ケド類が 26 秒に 1 回程度出現している計算となり、100 という逆接の接続詞にくらべ、かなり高い頻度である。この数字から考えると、ガ・ケド類にかりに逆接が多く含まれているならば、講義では、文と文の切れ目ではなく、節と節の切れ目で逆接が多く使われており、講義全体としても逆接基調であると言える可能性がある。

3. ガ・ケド類の逆接の割合

【表 3】から、ガ・ケド類の出現頻度が、逆接の接続詞の出現頻度よりはるかに高いことがわかった。では、ガ・ケド類のなかで、逆接ははたしてどのくらいの割合を占めるのだろうか。

用法の分類については、森田（1980）、三枝（2007）など、諸説あるが、ここでは、そのなかでも比較的わかりやすい永田・大浜（2001）の「逆接用法」「対比用法」「前置き用法」「提題用法」「挿入用法」「終助詞的用法」の 6 分類とその用法名を参考にする。

ただし、「逆接用法」と「対比用法」は区別が困難であることが多く、石黒（1999）にしたがうと、ガ・ケド類の「対比用法」はすべて「逆接用法」と考えることが可能である。そこで、本稿では「対比用法」を「逆接用法」に含める。

また、「終助詞的用法」という名称は、「文末用法」という名称に変える。内田（2001）や白川（2009）らの研究に見られるように、「言いさし」と呼ばれる文末のガ・ケド類の

用法は複雑で、すべてを「終助詞的用法」と呼ぶのは困難だからである。また、音声である講義を考える場合、講義を聞く受講者の立場からすると、線条的な構造が重要であり、線条的な構造を反映した名称が妥当と判断したからである。

こうした観点から、講義のガ・ケド類の用法を再整理すると、「逆接用法」「前置き用法」「提題用法」「挿入用法」「文末用法」の五つになる。この五つの用法をまずは説明する。

「逆接用法」は、先行する従属節から推論を行ったとき、後続の主文がその推論に反する関係になるものである。ほかの用法にくらべ、従属節に準体助詞「の」が入らないことが多い。

G-387 もちろん、その、女子中学生が、一時期「ぼく」というのをを使うケースはありますすけれども、それはいずれ消滅していくということになります。

すでに述べたように、対比的なものも、推論に反する結果を導くという点でこの逆接用法に含めて考える。

G-412 {女子学生の「うち」という自称詞使用について} 周りは使っているけど、自分は使わない。

「前置き用法」は、先行する従属節と後続の主文が直接的な論理関係を形成しないものの、先行する従属節で後続の主文の理解を助ける情報を示すものである。先行する従属節は、受講者がこれから耳にする内容を予告し、方向づける働きをする。

H-051 えーとー、最初は現代語の動詞ということに限ってお話をしますが、現代語の日本語の動詞、活用の種類っていうのは何パターンあるでしょうか。

先行する従属節と後続の主文の関係は多様で、なかには順接のような関係を持つものもある。ただし、ガ・ケド類が積極的に順接を表すわけではない。

H-128 と、そうすると、まあ、ここ、語幹のところ、空けてありますけども、えーと、書き込んでください。

H-128 に見られるように、前置きでは「けれども」のあとに「えーと」や「あの一」が来やすい。つまり、次に来る内容をあまり考えておらず、言ってから考えることが多い。その意味で、接続詞「で」と共通点がある(石黒 2010)。

「提題用法」は、単独の名詞や名詞句、ときには副詞節に後接し、文全体の話題や注目したい要素を提示するものである。従属節の内容を提示してから考えるという意味で「前置き用法」に近い。

G-219 じゃ、えっと、今日の話ですけれども、今日は、えっと、四つのことについて、えーと、皆さんにお話をしたいというふうに考えています。

「挿入用法」は、文法的な構造から考えるとやや不自然な位置に割って入る補足的な情報を示すものである。すでに述べた内容だけでは情報が不足していると話し手が判断した場合に、当初の発話計画を変更して入れるものである。聞き手の理解に役立つ情報を加える点では「前置き用法」と似ているが、計画を変更してあとから加えるという点に違いがある。

G-207 では、講義者 G が、日本人学生にわかる一般的な例として英語を挙げたものの、受講生のなかに中国人留学生が含まれていることを思い出して、発話計画を変更したものと考えられる。

G-207 で、あの、たとえば、英語、中国語もそうだと思いますけれども、あの、人称表現によって個性を出すということは、非常に難しいです。

「文末用法」は、文末にガ・ケド類が来るものである。補足的な情報を示す倒置のことも、すべてを語らないことで暗示的意味を聞き手に理解させる「言い残し」のことも、そもそもそこで完結している「言い終わり」のこともある（白川（1996）、内田（2001））。たとえば、A-018 は言い終わり、A-020 は倒置であると考えられる。

A-018 これは、あの、ま、私自身、日本語教師、つまり、留学生に日本語を教える仕事をしているわけですが、普段。

A-019 その中で、一つのトレーニングとして、リ、リダンダンシアというのがあります。

A-020 ま、聞き慣れない言葉だと思いますけれども↑。

これら五つの用法を整理した結果は次ページの【表 4】のようになる。この調査結果に基づき、次節で考察を行うことにしたい。

【表 4】ガ・ケド類の用法別出現頻度

		逆接	前置き	提題	挿入	文末	計
講義 A	ガ	7	20	4	17	3	51
	ケド類	16	30	7	11	7	71
	小計	23	50	11	28	10	122
講義 B	ガ	2	6	1	0	9	18
	ケド類	28	49	3	8	32	120
	小計	30	55	4	8	41	138
講義 G	ガ	4	3	0	6	1	14
	ケド類	55	76	51	49	11	242
	小計	59	79	51	55	12	256
講義 H	ガ	14	52	3	24	6	99
	ケド類	17	50	3	22	13	105
	小計	31	102	6	46	19	204
計		143	286	72	137	82	720

4. ガ・ケド類の諸用法の考察

【表 3】で見たように、講義 A の逆接の接続詞の数は 19、講義 B は 25、講義 G は 45、講義 H は 11 の計 100 であったのにたいし、【表 4】では、講義 A の逆接用法のガ・ケド類の数は 23、講義 B は 30、講義 G は 59、講義 H は 31 の計 143 であった。この結果、逆接の接続詞と逆接用法のガ・ケド類それぞれが、講義の逆接を表現するさいに役に立っていることが見えてはくるが、絶対数から考えてさほど多いとは言えない。したがって、「講義はかならずしも順接基調ではなく、文の切り方が他のジャンルと異なり、1 文のなかに逆接が含まれているのではないか」という本稿の仮説は成り立たないと考えられる。本稿では 4 本の講義しか見ていないので一般化には慎重にならざるをえないが、講義が逆接基調とは少なくとも考えにくいだろう。事実、ガ・ケド類全体に逆接用法の占める比率は 20% 弱である。

そこで、リサーチ・クエスションの③「逆接用法のガ・ケド類が多いなら、接続詞『でも』『しかし』などどのような関係にあるのか。また、もし、逆接のガ・ケド類がさほど多くないなら、いったいガ・ケド類は逆接以外のどのような機能を果たしているのか。」に立ち戻って考えると、80%強を占める後者の逆接以外の機能を見ていく必要があろう。

しかし、そのまえにまず「逆接用法」のガ・ケド類を、もう一度見ておきたい。逆接用法のガ・ケド類について一つ一つの用例を見ていくと、接続詞とセットで使われる例が目立つ。

B-406 足元にも及ばないぐらい、まー、立派なんだけど、でも、少しでもあやかりたい。

全データ中「(それ) でも」は 23 例、「ところが」が 1 例、そのほか、「そうではなくて」とその変異形が 3 例、対比の「一方(で)」が 2 例出現している。つまり、書き言葉とは異なり、講義におけるガ・ケド類は少数派なので、逆接や対比の接続詞の力を借りたほうが逆接であることがより明瞭に表せるという事情があるようなのである。講義に出現するガ・ケド類のうち、逆接用法が 20%弱であることにくわえ、この事実を重ね合わせると、留学生の講義の聴解力をみかくためには、講義においては、逆接用法がガ・ケド類の典型的な機能であるという先入観から自由になる指導をする必要があるだろう。

それでは、講義におけるガ・ケド類の典型的な機能として設定するのはどの機能がよいのだろうか。今回の資料を見るかぎりでは、どの用法もバランスよく出現しているようであるが、4 本の講義のいずれでも出現頻度 1 位であり、全体の約 4 割を占める「前置き用法」がその一番手ということになる。

ただ、前置き用法のやっかいなところは、先行する従属節と後続する主文との論理関係が不明確であるため、逆接用法であれば、形式スキーマを生かしてトップダウン的に処理できるのであるが、前置き用法の場合は、そうした論理関係を生かした理解はできない点にある。

先ほど、逆接用法のガ・ケド類を相対的に軽く扱ったほうがよいと述べたが、それは従来の日本語の教科書の扱いがあまりにも逆接用法に偏りすぎているからであり、逆接用法を的確に捉え、たとえば対比の「は」のような形式スキーマを生かし、強力なトップダウン処理ができれば、理解は正確かつ迅速になるだろう。事実、A-185では、「話し手の解釈が入るという意味では共通なんです」を聞けば、次の文にある「別の面では異なっている」という予測が成り立つ。

A-185 まあ、いずれにしても、その、えーっと、「つまり」と「要するに」は、話し手の解釈が入るという意味では共通なんです、先程見た3番の例のように、その、極端な言い換えも、「要するに」はできる。

A-186 つまり、「A、つまり B」、「A、要するに B」だけではなくて、そのAの部分のはっきりしないものに対しても、その、解釈を加えて、「要するに」を使うことができるという、そういう用法があるという点で、その、「つまり」と「要するに」は異なっているだろうと思います。

しかし、前置き用法が形式スキーマを使いにくいとは言っても、少なくとも、前置きとして示される情報は、後続する主文の理解に役立つ情報であり、内容スキーマを発動することは可能である。したがって、もしガ・ケド類に先行する従属節の内容が聴き取れていれば、後続文脈を聴き取るさいの手がかりには十分になりうるものである。

また、たとえ聴き取れなかったとしても、そこまでの情報は捨ててもよく、そのあとに続く情報に全神経を集中しなさいと留学生に指導することも可能であろう。長い講義を聞きつづけることは留学生にとって負担であるので、日本語の講義にはガ・ケド類によって生みだされる適度な「遊び」があるということを知っておくだけで、聴き取りへの心理的負担は軽減するはずである。

「提題用法」のガ・ケド類についても見ておきたい。この提題用法の出現頻度は、講義Gに大きく偏っている。その理由は明快で、箇条書きを多用するパワーポイントのスライドによる講義だからである。スライドのポイントとなる部分を提題用法で言及することが多く観察される。とくにスライドを切り替える前後でよく出現する。

G-527 で、えっと、次、最後のところなんですけれども、{スライド切り替え}時代とともに変わる人称、ということで、一応、五つの例を挙げてですね↑、終わりたいと思います。

近年、パワーポイントのスライドを用いた講義は増加する傾向にある。パワーポイントのスライドは視覚情報なので、漢字圏の受講者を中心に聴き取りの助けになる。また、提題用法によってスライドの指している箇所が分かれば、講義の話題やその前後の関係もわ

かり、講義内容全体の構造化も容易になる。講義の聴解授業では、このような点に着目した指導も今後必要になるとと思われる。

「挿入用法」は、以下の H-197 からわかるように、講義者が話している言葉を自分でモニターしているときに思いついたことを口にするところから生まれるものである。

H-197 で、だから「た」だけを語幹にするから、ここを全部消しちゃうことになって、そうすると、「べ」「べ」「べる」「べる」「べろ」、何 [なん] かこう {笑い}、あんまり言いにくいんですけど、「べ」「べ」「べる」「べる」「べれ」「べろ」「べ」っていう感じになるわけですね。

とくに、講義者が、目のまえにいる受講者の顔を見ながら自分の話をするときに、この説明では伝わらないと瞬時に判断し、補足情報を伝えることが起きる。これは、独話ならではの自己推敲過程と見ることができる。G-589 では、個人的なことを話しはじめ、そのようなことを受講生が知るはずがないことに気づき、補足情報を加えている。

G-589 たとえば、私が、えっと一、何でしょう、娘に対しては、あの一、その、下の娘、真理 [まり] っていうんですけれども、たとえば、「真理」、「真理」ということはできます、けれども、「妹」とか「娘」というふうに呼びかけることはできませんよね↑。

また、こうした補足情報がメタ言語的に働くことも多い。そのことで、受講者は理解の手かかりが得られ、混乱せずに講義に耳を傾けられるようになる。

H-583 あの、例外があるので、例外は後 [あと] で言いますが、とりあえず、今あるものだけで、ぱ一、ぱっと見ですよ、ぱっと見、母音動詞はこんな形かなと。

このような計画変更は、推敲の時間が十分にあり、不整表現が嫌われる書き言葉の場合は削除される一方、対話のような双方向性の高いもの場合は文が短いので、挿入というよりも倒置という形で現れやすくなると考える。

一方、「文末用法」は、独話である講義においてはさほど多くは出現せず、全体の 11% 強である。これは、同じ話し言葉でも会話に多いのとは対照的である (田 2013)。

会話の場合、文末用法のガ・ケド類を使えば、断定を回避し、相手の反応を引き出すことができる。たとえば、「思う」という動詞の場合、「私は～と思うんですけど。」と言うだけで、「あなたはどう思います？」という問いかけを含むことができる。ところが、講義の場合、「私は～と思うんですけど。」では、受講者の目にやや自信なさげに映るため、講義者は「私は～と思います。」で止めるのが普通であろうし、かりに講義者が受講者に問いかけたのであれば、「私は～と思うんですけど、みなさんはどう思います？」と主文を表出するのが一般的であろう。こうした事情を勘案すると、親しい人どうしの会話では文末用

法が優勢になり、講義のような公的な独話では挿入用法が優勢になることが予想されるのである。

ただし、講義Bにおいては、文末用法のガ・ケド類が目立つ。事実、全体の半数がこの講義Bで使われている。この4講義のなかだけでなく、全14講義を見ても、講義Bの話体はもっともくだけていて親しみやすく、まるで会話のようである。

- B-418 なくてもいいんだけど、こういうのが入ると、付加価値的な情報として、ほんと、本編と関係ないです。
- B-419 筋道からちょっと脇に入っちゃってるんだけど、でも、表現の幅を広げるっていうのかな↑。
- B-420 1個のことだけ伝えるんじゃなくてね↑、プラスアルファ、プラスアルファの、こんな遊びもあるよ、こんな脇道もあるよ、っていう、楽しさをプラスする意味で。
- B-421 で、わかる人にはわかる。
- B-422 で一、それで、わかんない人は、そこがわかんなくても、本筋は、ちゃんと理解できる。
- B-423 ということで言うなら、邪魔にはならないけど、おまけつきみたいな、そういう表現ですよね↑。
- B-424 で、それをね、井上ひさしは、すごいい好きで、やったらやりまくるんですよ↑。

このように気さくな語り口になると、独話の講義も対話に接近していき、それにともなって会話に特徴的なガ・ケド類の文末用法も増えると考えられる。

5. ガ・ケド類を含む長文への対処法

逆接用法が中心の書き言葉とは異なり、独話のガ・ケド類は前置き用法や挿入用法が気軽に用いられるため、複数のガ・ケド類の節を含む長い文になりやすい。その場合、前置きの階層性(小沼 2011)という観点が重要になる。

用法の組み合わせとして比較的多く見られるのが、前置き用法+挿入用法である。

- H-360 えー、この、1番の活用のこのタイプ。
- H-361 これ、あの一、まずですね、えー、音便の話をする前に、えー、気づいていたきたいことがいくつかあるので、ちょっと、それをお話したいと思うんですが【前置き】、えーっと、まあ、2番の活用も似たようなところありますけど【挿入】、まあ、1番のほうで、今は話をしたいと思います。

1 番の活用表を使ってお話しするので、そちらをご覧くださいというつもりで始まった発話だと思われるが、似たような 2 番の活用表が目に入ってしまったため、受講者の誤解を招かないようそちらにも言及したというパターンである。書き言葉の感覚では、主文の「1 番のほうで、今は話をしたいと思います。」という出発点に戻る終わり方は重複していて不自然に感じられるかもしれないが、話し言葉ではごく自然な現象である。

それが少し複雑になったのが、A-084 のようなパターンである。A-084 では、書き言葉で言い換えが起きる理由を述べたあと、「すなわち」「つまり」「要するに」の各用法の説明に映るといのがおそらく講義者の当初の計画であったと思われるが、話し言葉で使う形式である「ていうか」が目に入ってしまった結果、それについて言及せざるをえなくなり、言及した結果、それをここでの対象外であることをさらに説明せざるをえなくなっている。

A-084 まあ、書き言葉における言い換えというのは、以上のような、まあ、理由で行われるんだらうと思いますが【前置き】、(4) それぞれ、えっと、「すなわち」と「つまり」と「要するに」、ま、「ていうか」まで入ってますけれども【挿入】、「ていうか」は、ま、話し言葉専門なんで、あとで説明することになりますが【挿入】、「すなわち」「つまり」「要するに」、この三つの言葉が、あの、どういうニュアンスの違いを持って、どういう役割を果たしているか、ということを少し見たいと思います。

それがさらに複雑になったのが、H-759 のようなパターンである。H-759 の前半部は、階層性が見られる大小の前置きがつながっているが、小さい前置きのポイントがより明確に伝わるように、二度の挿入が行われている

H-759 はい、えーっと、ちょっと話を戻しますけど【前置き】、それで、まあ、この活用表をちょっと見ていただきたいんですが【前置き】、一体何が原因で、えーっと、現代語の動詞のような形に、まあ、五つ [いつつ] なら五つ [いつつ] ですね、そちらに変化してしまったのかっていうことを見たいんですが【挿入】、えーっと、まあ、これに気づいていただけたらと思うんですがけども【挿入】、ラ行変格活用を見てください。(1)

最初の挿入では「が」を用いたかなり詳しい言い換えがなされ、2 度目の挿入では「けども」を用いたカジュアルな言い換えがなされている。たとえて言うと、前置きは漆器作りの「研ぎ」の過程、挿入は「塗り」の過程のようなものである。木地を繰り返し研ぎ、繰り返し塗ることで、腕は洗練されていく。同じように、講義のポイントにさしかかると、講義者は前置きと挿入を繰り返し、講義の内容は洗練されていくのである。

文の構造を分析すると、かなり複雑であるが、情報を理解することと文の構造を理解することはイコールではない。似たような情報が丁寧に塗り重ねられていることに受講者が

気づきさえすれば、文の構造自体はわからなくても内容は理解できるようになっている。ガ・ケド類が頻出するあたりでは、講義者が伝えたいことを、角度を変えて繰り返し伝えようとしていることを知ることが、講義理解のコツである。

また、文の構造がいくら複雑になっても、基本構造は「前置き→挿入」という順序である。この基本構造がわかっているならば、長い文でも、聴き取りには大きな支障がないと思われる。

6. おわりに

調査結果およびその考察からわかったことは、次の5点である。

- ① 講義におけるガ・ケド類は26秒に1回程度出現している。
- ② 講義のガ・ケド類のうち、前置き用法が4割程度でもっとも多く、続いて逆接用法、挿入用法が2割弱、文末用法、提題用法が1割強となる。
- ③ 講義全体では逆接用法のガ・ケド類は多いとは言えない。また、ガ・ケド類が逆接用法を喚起するのに逆接の接続詞の力を借りることがある。
- ④ 前置き用法は予告的に、挿入用法は補足的に受講者の理解に役立つ情報を示す。この二つは文の構造を複雑にしがちだが、文の構造ではなく情報の内容に意識が向けば、講義のポイントを知る手がかりとなる。
- ⑤ 提題用法はパワーポイントのスライドとともに使われやすく、視覚情報を用いた講義内容の構造化が図りやすくなる。
- ⑥ 相手の反応を引き出すことを目的とした文末用法は、あまり多くは使われないが、会話に近い話体の講義では増加する傾向にある。

この結果から、留学生の講義理解を促進する教育を考えるうえで、ガ・ケド類をどのように捉えればよいか、一定の示唆が得られたと考える。ただし、今回は4本の講義を扱ったに留まる。一般化のためには、より多くの講義を資料とした分析が必要である。今後の課題としたい。

参考文献

- 青木優子(2014)「講義の談話の接続表現の出現傾向」『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』pp.60-73、一橋大学国際教育センター石黒研究室
- 石黒圭(1999)「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198、pp.114-129、国語学会
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋(2009)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12、pp.73-85、一橋大学留学生センター

- 内田安伊子 (2001) 『『けど』で終わる文についての一考察—談話機能の視点から—』『日本語教育』109、pp.40-49、日本語教育学会
- 小沼喜好 (2011) 「前置きの階層性について」『流通経済大学流通情報学部紀要』15-2、pp.27-40、流通経済大学流通情報学部
- 金久保紀子 (1993) 「大学の講義における接続の表現」『日本語と日本文学』18、pp.1-11、筑波大学国語国文学会
- 三枝令子 (2007) 「話し言葉における『が』『けど』類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』10、pp. 11-27、一橋大学留学生センター
- 佐久間まゆみ (2013) 「1. 『談話型』から見た講義の談話展開」『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』p.28、日本語学会
- 白川博之 (1996) 『『けど』で言い終わる文』『広島大学日本語教育学科紀要』6、pp.9-17、広島大学教育学部日本語教育学科
- 白川博之 (2009) 『『言いさし文』の研究』くろしお出版
- 田昊 (2013) 『『言いさし』の『けど』類の使用実態に関する一考察—日本語教育文法の視点から—』『日本語教育』156、pp.45-59、日本語教育学会
- 永田良太・大浜るい子 (2001) 「接続助詞けどの用法間の関係について—発話場面に着目して—」『日本語教育』110、pp.62-71、日本語教育学会
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い方—』角川書店

付記

本稿は、2011～13 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」(課題番号: 23320110、研究代表者: 佐久間まゆみ) の研究成果の一部である。

(いしぐる けい 国際教育センター教授)